を身にまとひ居たり、彼是と考へ察すれば、古鼠が旅の僧に化て來り、住職を喰はんとせしを、飼猫が舊恩の爲に命を捨て、住職の災を除きしならんと、人々も感じ入、頓て二疋の猫の塚を立て回向をし、鼠も最怖ろしき變化なれば、捨おかれずと、住持は慈悲の心より猫と同じ樣に塚を立て、法事をせられしが、今猶傳へて此邊を往來の人の噂に殘り、塚は兩墓とものさびて寺中にあり、

〔花月草紙四〕むすめの十あまり六つ七つになりたるを、月花にもかへじと思ひたるに、としごろかふ猫の、むすめがかはやへゆけば、かならずあとよりつきて行く、いかにせいすれどもきかず、つなぎをくにかはやへ行くときは、かならず去りてたけうなりて、なはくひきりてはせてゆく、いかにとたづぬれば、かはやのうちにつとつきそひて居侍るといふ、いかにも心のそこ去りがたしとて、おやなりけるもの、つるぎもちゐてかのねこのかはやへはせ行くとき、かうべをきりたれば、そのかうべかはやのうちにいりぬ、彌あやしみおどろきてみれば、そのかうべかはやのうちなるくちなはにくひつきて、くちなは、死してけり、さらばそのむすめにくちなはの思ひいりたるを去りて、かくはありけりと、なみだおとさぬはなかりしとなり、冤牛とかいふ事、かの國のふみにもありとなり、猫のうらみはいかにといへば、もとよりものいふ事ならぬみなれば、それにうらみもなし、かのくちなはをころして、君の難をすくひぬれば、たゞにほゐとげしなり、もとより功名に心なければ、おもひをくこともあらじかし、たゞかひをけるあるじの心はいかがありけむ、

怖猫

〔今昔物語二十八〕大藏大夫藤原清廉怖猫語第卅一

今昔、大藏ノ丞ヨリ冠リ給ハリテ、藤原ノ清廉ト云フ者有キ、大藏ノ大夫トナム云ヒシ、其レガ前世ニ鼠ニテヤ有ケム、極ク猫ニナム恐ケル、然レバ此ノ清廉ガ行キ至ル所々ニハ、若男共ノ勇タ